

心は五箇條の精神なり、心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆表面の裝飾りにて何の役にかは立つべき』——黑板の前で幾ら嘉言善行を説いても、誠心を啓發しなれば『うはべの裝飾にて』——即ち教育が形式化して『何の用にかは立つべき』——役に立たぬのぢや。さてこの誠心を開くにはどういふ工合に教育されて居るか、黑板の前の講釋だけで誠心が開かれるものではあるまい。儒教で申せば天道明德といつて、天道を敬ふとき明德が眼を覺すのであり、惟神道で申せば敬神の觀念のそこに和魂が開かれる、佛教で申せば本佛を渴仰するとき佛性が目を覺ますと教へて居るのである。佛教に於て本佛を斥け、儒教に於て天道を斥け、神ながらの教に於て敬神の誠意を斥けたとき、何に依つて人の誠心が開かれるか。先帝陛下も仰せられて居る、

目にみえぬ神にむかひてはぢざるは

人の心のまことなりけり
目にみえぬ神のこゝろに通ふこそ

人の心のまことなりけれ

くもりなき人の心を千早ふる

神はさやかに照しみるらむ

神に向ふた時人間の誠心が開かれるのである。そこに宗教的教化が缺けたとき、人間の誠心は開かれない、誠心の開かれない時徳器は成就しない、徳器が成就しないとき、教育の目的は達せられないではないか、形式だけで済ますといふことになる。それ故に成立宗教を奉ずることは別としても、道徳の根柢には宗教的の要素が存することを知らねばならぬ。

それ故にこの意味を教育勅語の何處から説きになりますか。私は「恭儉己れを持し」といふ「恭」の字は、儒教で云へば天道を敬ふ誠敬であり、惟神道で云へば神を敬ふ真心であり、佛教で云へば佛を渴仰する信心から出て來るので、恭の徳は此處に基くと思ふ。若し教育勅語にあるとするならば、恭儉の「恭」の字かと思ふのであり